

吉川英治・作 「三国志」より抜粋

夕方にかけて、おそろしく騒がしくまたあわただしい取引が始まった。

劉備は、そのやかましい人声と人影の中に立ちまじって、まごついていた。彼は、自分の求めようとしている茶が、仲買人の手にはいることを心配していた。一度、商人の手に移ると、莫大《ばくだい》な値になって、とても自分の貧しい囊中《のうちゅう》では購《あがな》えなくなるからであった。

またたく間に、市の取引は終わった。仲買人も百姓も物売りたちも、三々五々、夕闇へ散ってゆく。

劉備は、船の商人らしい男を見かけてあわててそばへ寄って行った。

「茶を売って下さい、茶が欲しいんですが」

「え、茶だって？」

洛陽《らくよう》の商人は、鷹揚《おうよう》に彼を振向いた。

「あいにくと、お前さんに頒《わ》けてやるような安茶は持たないよ。一葉《ひとは》いくらというような佳品しか船にはないよ」

「結構です。たくさんは要《い》りませんが」

「おまえ茶をのんだことがあるのかね。地方の衆が何か葉を煮てのんでいるが、あれは茶ではないよ」

「はい。その、ほんとの茶を頒《わ》けていただきたいのです」

彼の声は、懸命だった。

茶がいかに貴重か、高価か、また地方にもまだない物かは、彼もよくわきまえていた。

その種子《たね》は、遠い熱帯の異国からわずかにもたらされて、周《しゅう》の代にようやく宮廷の秘用にたしなまれ、漢帝の代々《よよ》になっても、後宮《こうきゅう》の茶園に少し摘《つ》まれる物と、民間のごく貴人の所有地にまれに栽培されたくらいなものだ

とも聞いている。

また別な説には、一日に百草《そう》を嘗《な》めつつ人間に食物を教えた神農《しんのう》はたびたび毒草にあたったが、茶を得てからこれを嚙むとたちまち毒をけしたので、以来、秘愛せられたとも伝えられている。

いずれにしろ、劉備の身分でそれを求めることの無謀は、よく知っていた。

——だが、彼の懸命な面《おも》もちと、真面目《まじめ》に、欲するわけを話す態度を見ると、洛陽の商人も、やや心を動かされたとみえて、

「では少し頒けてあげてもよいが、お前さん、失礼だが、その代価をお持ちかね？」と訊いた。

「持っております」

彼は、懐中《ふところ》の革囊《かわぶくろ》を取出し、銀や砂金を取りまぜて、相手の両掌《りょうて》へ、惜しげもなくそれを皆あげた。

「ほ……」

洛陽の商人は、掌《て》の上の目量《めかた》を計りながら、

「あるねえ。しかし、銀《ぎん》があらかたじゃないか。これでは、よい茶はいらさま上げられないが」

「何ほども」

「そんなに欲しいのかい」

「母が眼を細めて、よろこぶ顔が見たいので——」

「お前さん、商売は？」

「蓆《むしろ》や簾《すだれ》を作っています」

「じゃあ、失礼だが、これだけの銀《かね》をためるにはたいへんだろ」

「二年かかりました。自分の食べたい物も、着たい物も、節約して」

「そう聞くと、断われないな。けれどとても、これだけの銀と替えたんじゃ引合わない。な

にかほかにないかね」

「これも添えます」

劉備《りゅうび》は、劍の緒《お》にさげている琅カン《ろうかん》の珠を解いて出した。洛陽の商人は琅カンなどは珍しくない顔つきをして見ていたが、

「よろしい。おまえさんの孝心に免じて、茶と交易してやろう」

と、やがて船室の中から、錫《すす》の小さい壺《つぼ》を一つ持ってきて、劉備に与えた。

黄河は暗くなりかけていた。西南方に、妖猫《ようびょう》の眼みたいな大きな星がまたたいていた。その星の光をよく見ていると虹色の暈《かさ》がぼっとさしていた。

——世の中がいよいよ乱れる凶兆《きょうちょう》だ。

と、近頃しきりと、世間の者が怖《こわ》がっている星である。

2013 年 7 月 11 日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。